「イエスを見つめて走り続ける」
ヘブライ人への手紙 12 章 1－13 節

1 節に「こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか」とあります。ここでは、信仰生活を一つの競争にたとえて語っています。競技場いっぱいに応援してくれている人たちがいる中を、ランナーである私たちが励まされながら一所懸命に走っている情景を連想させます。

「おびただしい証人の群れ」というのは、いにしえの信仰者たちです。彼らの歩みを見てみると、およそ平坦な道を歩んだ人は一人もいません。むしろ、信仰の歩みを歩んだが故に、かえって厳しい人生を生き抜いて行きました。

この信仰によって生涯を歩んだ人たちには、ある共通点があります。それは「望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認」（ヘブライ 11:1）。この御言葉は、私たちが信仰の英雄たちのように忍耐強く走り抜くための秘訣を教えています。それは将来に対する希望です。しかし、ここで言われている希望とは、「信じれば夢はかなう」とか、「私のお願いを神様が叶えてくれることを信じる」というものではありません。信仰者が望む事柄というのは、「神さまの約束と目的は必ず成就する」ということです。そのことに確信を持つとき、私たちは、絶望することのないはっきりとした希望が与えられるのです。そして、この希望を持ったときにこそ、私たちに与えられている恵みにも気付くことが出来るのです。

人は苦しみの中にいるとき、希望を失い、絶望と孤独という思いに駆られ前進することが出来なくなってしまいます。けれども、御言葉によって希望が与えられるとき、たとえ人生のどん底、誰一人周りに味方がいないように思える時でも、日々の生活の中の小さな一つ一つの事柄の背後に、必ず神さまが共にいて働いてくださっているということを「見えない事実」として確認することができます。そして、そのような経験を通して、私たちの信仰は、ますます強められていくのです。

聖書の中のおびただしい証人たちも、また、ここに記念された召天者の方々も、神さまが私の人生を担ってくださっているという事実を見ていたが故に、厳しい生活の中にあっても希望を持ちつつ、苦しみを耐えながら乗り越えて行くことが出来たのです。そして、自分のなすべきことをなし終えて、天の国に凱旋して行ったのです。

今、このような証人たちが私たちの回りにいて、あなたがたもこの道を全うすることができるようにと、たえず声援を送ってくれているのです。私たちはそのような中で、神を信じる者としての信仰の道を生きているのです。

とはいえ、現実は厳しいものです。いくらそうありたいと思っていても、いざ自分の目の前に苦しみや悲しみが押し寄せてくると、おろおろとうろたえてしまうのが私たち人間の弱さです。弱さのゆえに、神さまに感謝することを忘れ、不平不満を口にし、主に信頼することを失い、「絡みつく罪」に足を取られてしまう。ですから、私たちは、絶えず一つの真実に目を注いでいる必要があるのです。

それは何か。2 節に「信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、

御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。」とあります。私たちが本当に仰ぎ見なければならないのは、信仰の創始者であり、完成者であるイエス・キリストの姿であると聖書は言います。

　そのイエス・キリストの生涯ほど、困難を極めたものはありません。イエスさまの前には、サタンが立ちはだかり、また、さまざまな人々が幾度となくキリストの歩みを妨げようとして立ちはだかっていきました。最後には、「死」という刃を突きつけて、勝利の道を止めようとしました。けれどもイエスさまは、十字架の死に至るまで父なる神の御言葉に従い、耐え忍び、そのすべてを克服して神の右の座に着かれたのです。

　イエスさまがこの世にあって、すべての苦しみを耐えることができたのは、神さまの約束があったからです。イエスさまの心には、いつも御言葉がありました。そして、その御言葉を力とされたのです。それゆえ、父なる神さまの約束の御言葉どおり、イエスさまは、神の子の座を回復されたのです。

　しかし、それはすべて私たちのためでした。イエスさまは、ご自分の喜びのためではなく私たちの喜び、すなわち、イエス・キリストの十字架と復活の御業によって私たちにもたらされる永遠のいのち、そのことのために恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍んでくださったのです。もっと正確に言えば、私たち一人ひとりが永遠の滅びから救われて永遠のいのちをいただき、天の御国に住まうことが出来るという私たちの喜びを、イエスさまご自身の喜びとしてくださったのです。

　このイエス・キリストを見つめる時、イエス・キリストが私たちに示してくださった愛の大きさを見つめる時、そこには必ず言葉には言い尽くせない喜びが待っています。そして、それがあるから私たちは、目の前にどんな苦しみがあっても、それを耐え忍び、走り続けるのです。

　私たちに定められている競争は、誰かと競い合う競争ではありません。一人ひとりそれぞれに与えられた走るべき道のりです。だから、早く走る必要はありません。歩いてしまっても構いません。疲れて立ち止まってしまうこともあるかもしれません。でも、最後まで走り抜く。どうか、イエス・キリストが開いてくださった天の御国への道を、私たちもゴールするその時まで走り抜く者でありたいと願います。